

資 料

総合英語：学生アンケート結果

ジョン・ウィルトシャー, 鎌田 幸雄, 森 茂利

All-Round English: Feedback from Students

John WILTSHIER, KAMATA Yukio and MORI Shigetoshi

1. はじめに

① 本稿の目的

本稿の目的は本学の外国語必修科目である「総合英語Ⅰ」が学生に与える学習効果について調査・検討することにある⁽¹⁾。

この目的を遂げるため、受講学生にアンケート調査を行った。アンケートによって総合英語に対する学生の意見や、総合英語で学生が行う学習の実態を調査できると考えられるからである。具体的には次の質問に対して学生に回答してもらった。すなわち、総合英語での「提供される学習の機会」、「使用されている教材」、「教え方」、「評価方法と学生の学習意欲との関係」についてである⁽²⁾。

以下に2000年度から2003年度の4年間にわたるアンケートの質問事項への学生の回答を報告する。またそこから得られた学生の学習パターンや学習態度の傾向についても併せて報告し、さらに、そのような傾向が現れた理由についても考察したい。

② アンケートについて

アンケートは無記名で行なわれ、次の4つの質問で構成されている。Question 1では総合英語が「学生に英語の技能を練習する機会を与

えているか」について、Question 2では「使用されている教材が適切であるか」について、Question 3では「どれくらい学生が教員に質問したか」について、Question 4では「ポイント制と学生の学習意欲との関係」についてである。アンケート結果は2000年度から2003年度までの4年間に毎年行なわれたものから集計した。

③ サンプリングと妥当性

アンケートは4年間にわたって毎年授業期間の終盤(12月か1月)に行なわれたが、アンケート用紙は受講生全員にではなく、受講生の一部に配布した。その際、学生の現実を歪めることのない程度で尚且つ処理上煩瑣にならないように注意した。2000年度はアンケート用紙は「教養演習Ⅰ」の担当教員を通してできるだけ多くの受講生に配布された。2001年度以降アンケート用紙は「総合英語Ⅰ」の授業時間内に配布された。2001年度は配布数を減らして配布したが、2002年度以降はデータの妥当性を高めるため配布数を増やした。したがってサンプル数は年毎に異なっている。すなわち、2000年度は138名、2001年度は53名、2002年度は109名、2003年度は167名である。

アンケート用紙は受講生のポイントに応じてほぼ同数配布した。その配布数は学生にその時

点での獲得ポイント数を答えてもらうことで調整した。つまり、0 から 100 ポイントの学生を 10 名、101 から 200 ポイントの学生を 10 名、201 から 300 ポイントの学生を 10 名というように、アンケート用紙の配布数を調整するように努め、回答する学生にポイント面での偏りが無いようにした⁽³⁾。これにより、回答した学生の意見が総合英語を受講する学生全体の意見がある程度反映していると思ふことができる。

2. 学生アンケートの結果

2. 1. Question 1

Question 1 の目的は教員が考える総合英語の目標が達成されているか否かについて、学生の意見を聞くことにある。

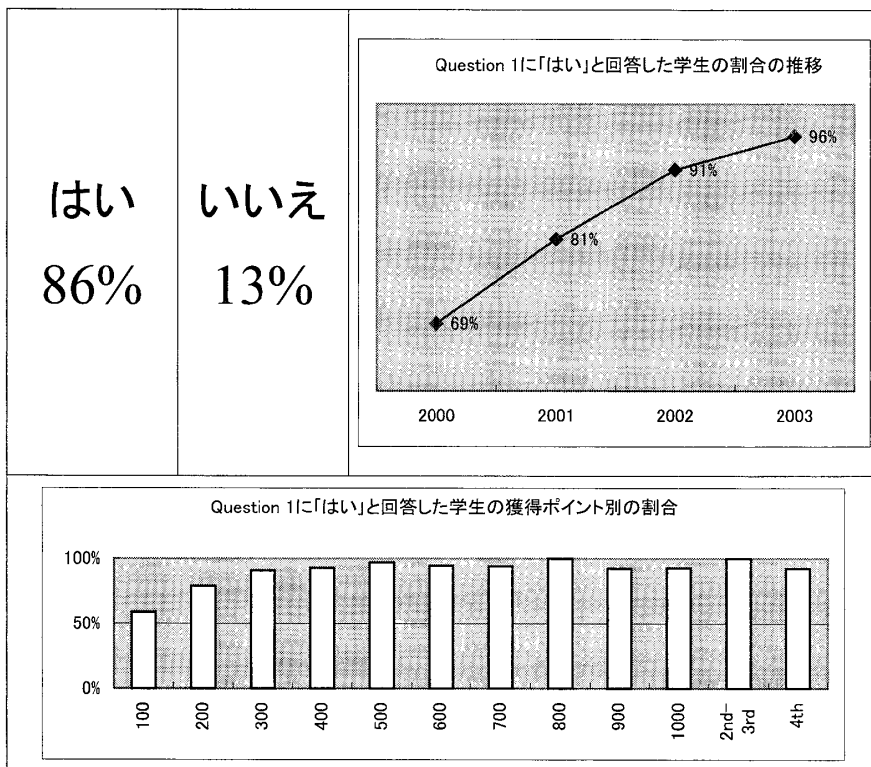
Question 1: 総合英語 I の目標は君たちに英語

の練習をする機会をあたえることにあります。様々な方法で英語の勉強をする機会があったと思いますか。

Question 1: 議論

4 年間の平均では 86% の受講生が「総合英語」が英語を学習する機会を与えていると回答している。「はい」と答えた学生の割合は年毎に増加し、2003 年度では 96% の受講生が「はい」と回答している。この傾向はおそらく学生に英語を学習する機会を増加させることを目的にシステムを毎年調整・改定したことと無関係ではないと思われる(例えば、2002 年度に新しい分野として Vocabulary を創設したり、各開講分野において受講する機会を増やすために開講回数を柔軟に調整したりした)。また、受講生自身が「総合英語」のシステムの中で期待される役割をしっかりと認識してきたことも関係していると考えられる。マルチメディアを使用した「オリエンテーション」で前年度の受講生の各

Question 1: 回答結果⁽⁴⁾



分野での授業風景を示したことが、学生たちに総合英語のシステムで期待される役割を周知するのに役立ったのかもしれない。また、年を経るにつれ総合英語のシステムを経験した学生が増えていったことも役割の周知に一役買っているとも考えられる。つまり総合英語を既に修得した学生は新生に総合英語のシステムについて教えることが可能であり、実際そうしていたと考えられる。

獲得ポイント別の回答を見ると、100ポイント以下の学生は「はい」と回答した割合が最も低い。「いいえ」と回答した学生理由はほぼ一致しており、「教材のレベルが難しすぎる」であった。また、ポイントの高い学生で「いいえ」と回答した理由の中には、教員と受講生の割合（教員5人に対して学生約200名）を挙げているものもあった。

2. 2. Question 2

Question 2 は授業で使用されている教材に関するものであり、Question 2a と Question 2b の二つの質問からなる。

Question 2a は個々の学生の英語能力にあった教材が授業で提供されているかについて学生の意見を引き出すためのものである。

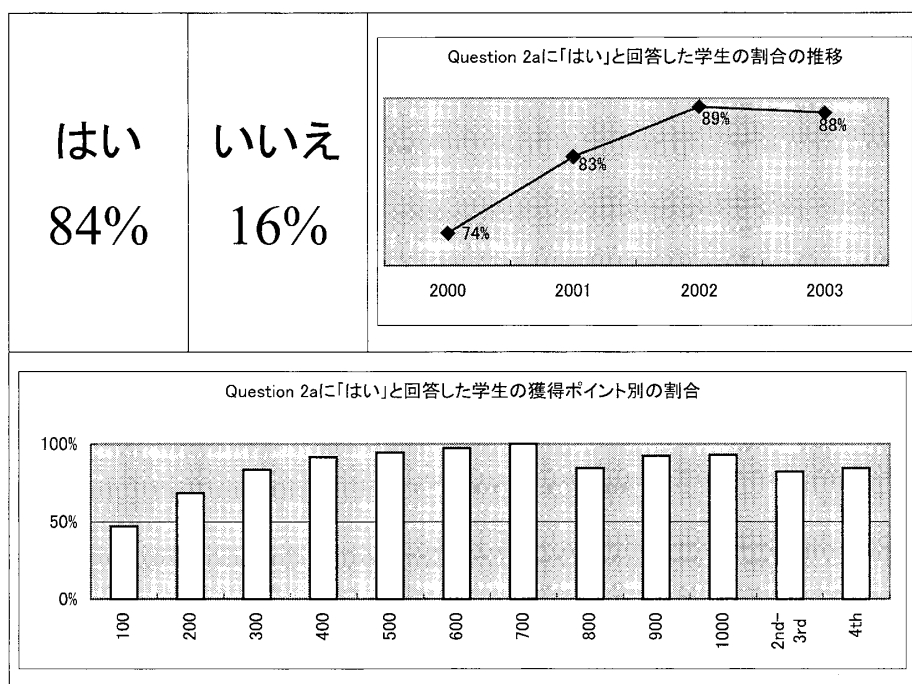
Question 2a: あなたのレベルに合っている教材は十分ありますか。

Question 2a: 議論

4年間の平均では84%受講生が総合英語で使用されている教材が自分のレベルに合っていると回答している。この事は、学生が自分に合った教材を選んで学習していることを意味していよう。「はい」と答えた学生の割合は最初の3年間で大きく増加している。2003年度には幾分減少したが、それでも88%の受講生が「はい」と答えている。この傾向は導入年度以降に学生が選べる教材の量と種類を増やしたことによる考えてまず間違いはない。

獲得ポイント毎のグラフを見ると、ポイント数の少ない学生が「はい」と答えた割合が少ないことを示している。このことはポイント数の少ない学生のためにもっとレベルの低い教材が

Question 2a: 回答結果



必要であることを示しているのかもしれない。しかし出席のデータは、ポイント数の少ない学生が、教材が難しすぎてポイントを取れないのではなく、そもそも授業に出席する割合が低いことを明らかにしている（3節で詳説）。

Question 2bの目的は2aと同様に教材の適切性を問うものでありが、学生たちに「チャレンジしてみたい教材があるか」を問うことにより、総合英語がKrashenの言う「個人のレベル+1のレベル」(the $i + 1$ level)⁽⁵⁾を学生たちに提供しているのかを確認するものである。

Question 2b: チャレンジしてみたい教材は十分ありますか。

Question 2b: 議論

2000年度はQuestion 2bへの回答結果はQuestion 2aほど「はい」と答えた学生の割合は多くなく57%に留まった。しかしその割合は2年目で増加し、2003年度では77%の学生がチャレンジしたい教材を見出している。

獲得ポイント毎のグラフを見ると、500か

ら600ポイントの学生が「はい」と答えた割合が高い。このことはもっと高いポイントの学生には今よりレベルの高い教材が必要とされていることを暗示していると考えることができる。しかし、現在使用している教材は中学生レベルからTOEFLやTOEICの練習問題までとかなり広範囲に及んでいることを考えると、これ以上範囲を広げるのは困難であると思われる。おそらくここで必要とされていることは学生に対し用意されている教材の情報をもっと与えること、適切な指導・助言によって学生に1ランク上の教材にチャレンジするよう働きかけることであろう。

2. 3. Question 3

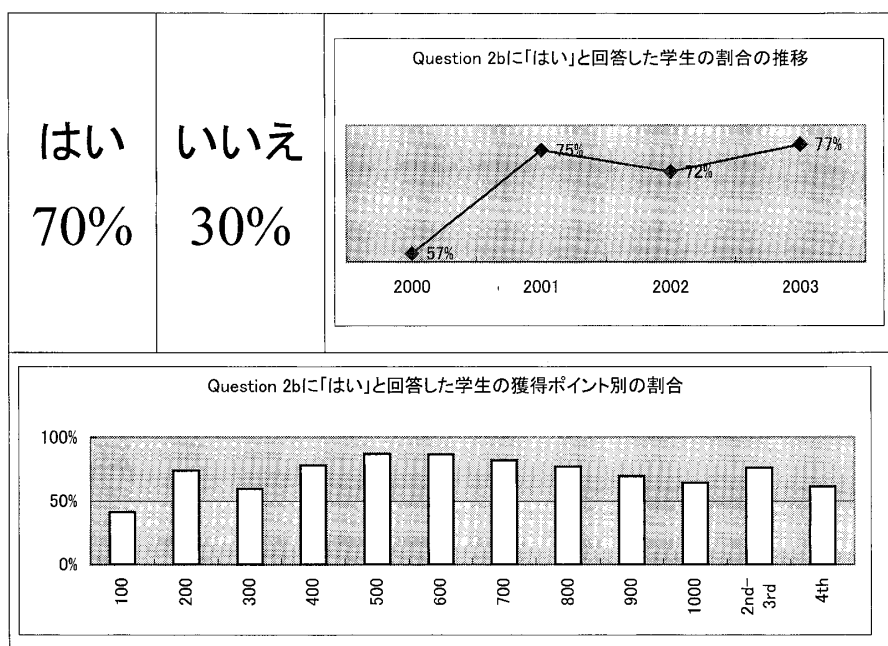
Question 3はどれくらいの割合の学生が授業中に教員に質問したのかを明らかにするためのものである。

Question 3: 先生に質問したことがありますか。

Question 3: 議論

導入年度の2000年度のアンケート結果で、

Question 2b: 回答結果



この質問に対して「はい」と答えた学生の割合が低かったことが最も懸念された。総合英語のシステムは、学生自身が積極的な学習者であり、教員は学習の「促進役 (facilitator)」であることに基づいて運営されている。これがうまく機能するためには、学生は自分たちの役割を受け入れ、必要な場合は積極的に質問することが要請されている。2000年度では57%の学生しか教員に質問していない。この事は、このコースがその目標の一つとして掲げた「英語学習の機会を学生に提供する」ことを、約4割の学生が積極的に生かしていないことを意味している (Question 1を参照)。幸いなことに、教員に質問する学生の割合は年を追う毎に増大しており、2003年度では76%の学生が質問している。

獲得ポイント毎のグラフを見ると、ポイントの少ない学生が質問する割合も少ないことがわかる。このことはポイントの少ない学生が質問しようとしないうこと、ないしは何を質問してよいかかわからないことを示していると考えられる。あるいはその学生たちが頻繁に出席している学習分野と関係があるかもしれない。すなわち、GrammarとVocabularyは講義形式の分

野であり、学生が質問する機会が他の分野に比べて少ない。

学生が英語について—それがどのような内容のものであれ—質問することが、学生の授業への積極的参加を計る一つのバロメーターだとすれば、今後の一つの課題として、アンケートの質問項目に「教材の内容について他の受講生に質問したことがあるか」という項目を付け加える必要があるかもしれない。

2. 4. Question 4

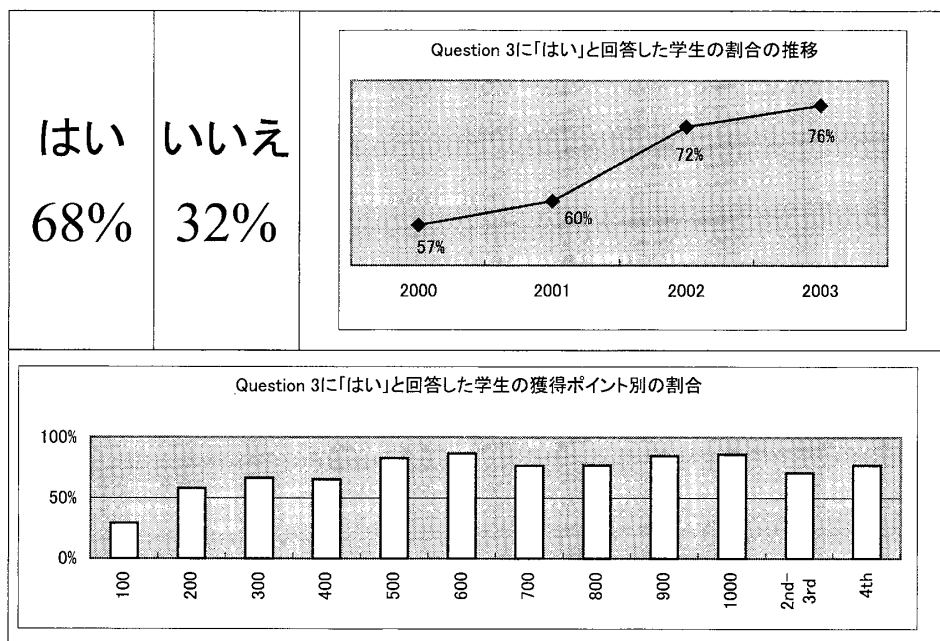
Question 4は4a、4b、4cの三つの質問から構成され、総合英語で使用されている評価システムについて学生がどのように感じているのかを問うものである。

Question 4a: この評価システム (何かをすれば POINT をもらえる) は公平ですか。

Question 4a: 議論

4年間の平均では74%の受講生がこの評価システムを公平であると考えている。公平であると考える受講生の割合は導入年度の57%か

Question 3: 回答結果



ら増加し、2003年度では約8割の学生が公平であるとしている。これはオリエンテーションのやり方を工夫したこと—これによって、初めて総合英語を受講する学生は具体的な情報を得ることが可能となった—および総合英語の授業のやり方が仙台大学の学生にとってもはや新奇なものではなくなったことを反映していると思われる。新入生は上級生がどのように総合英語の単位を修得したかを見聞きすることが出来るからである。

獲得ポイント毎のグラフを見ると、ポイントの少ない学生が「はい」と回答した割合が少ない。興味深いことに、「いいえ」と回答した受講生はその理由が共通しており、個々の学生の英語のレベルが異なっているのに、単位習得のために学生全員が同じレベル（500ポイント）を要求されていることを挙げている。「いいえ」と回答した受講生が全て英語の試験を経ずに入学した学生であるのかは定かではないが、この不公平感を減少させるために、例えば一般入試で入学した学生は500ポイント、推薦入試やAO入試で入学した学生は250ポイントにすると

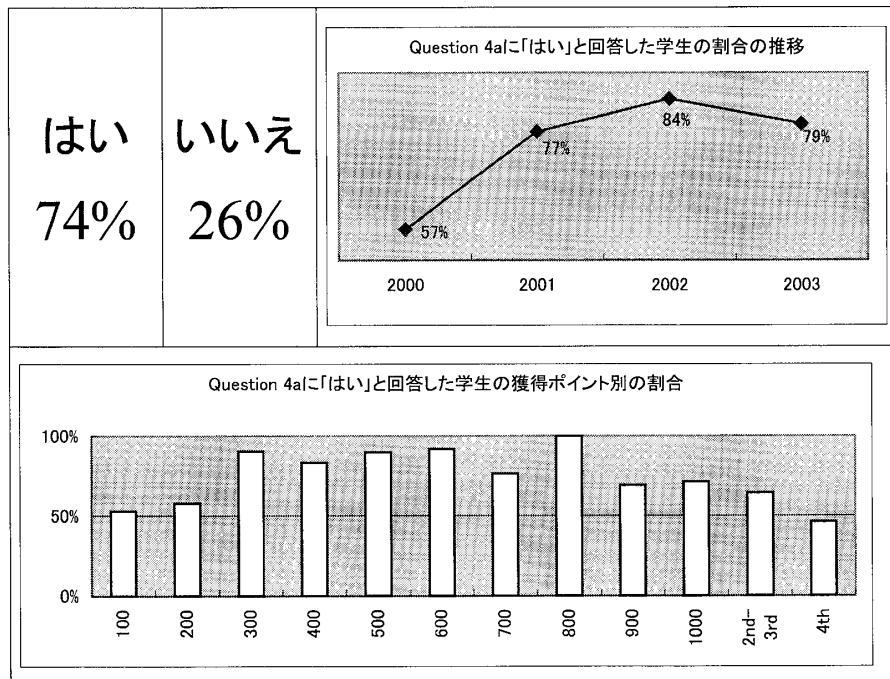
いったような、単位修得のレベルを入試形態毎に異なったものにすることが一つの選択肢として考えられる。しかし、最新（2003年度）の回答結果で79%の受講生がこの評価システムを公平であるとしていることを考えれば、そのような方法が必要であるのかは議論の余地がある。また、この問題は英語に限られたものではなく、全ての必修科目に共通するものであろう。したがって、入試形態別に評価方法を変えるか否かの決定は、英語だけの問題ではなく、大学全体の教育方針の問題であろう。より容易な対応策として、推薦入試やAO入試を受験した受験生に対し、入学後にどのような特別な措置も無く、全ての学生が同一の方法で扱われることを、入学する以前に周知徹底することが考えられる。

Question 4b: この POINT による評価システムはあなたに勉強する意欲を与えましたか。

Question 4b: 議論

4年間の平均では78%の受講生がPOINTシ

Question 4a: 回答結果



システムが勉強する意欲を与えたと回答している。この2年間でそれぞれ90%と89%の受講生が「はい」と回答していることは注目に値する。

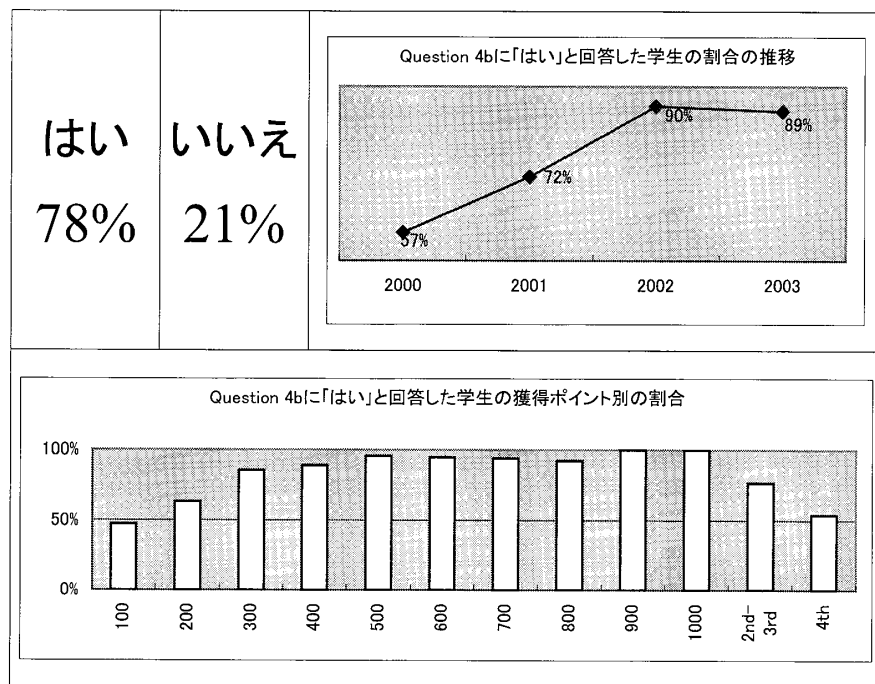
ポイントに基づいたシステムでは、目標(500ポイント)に到達した後に受講生の学習意欲が減退することが懸念されるのだが、獲得ポイント毎のグラフを見ると、高いポイントの学生の学習意欲は減退していないことは明らかである。むしろPOINTシステムがさらに学習する動機づけになっているように思われる。懸念は杞憂であったようである。学生が気軽に質問できる大学院生のティーチング・アシスタントを増やしたことや、総合英語のシステムを理解し積極的に協力してくれる非常勤教員を導入し、できうる限り学生の疑問・質問に対応できるシステムを作ったことが、「はい」と回答した学生の比率の高さの他の要因であるかもしれない。

Question 4c: このPOINTによる評価システムでなく従来(高校の時)のやり方でも同じぐらい努力すると思いますか。

Question 4c: 議論

4年間の平均では33%の受講生がPOINTシステムでなく従来(高校の時)のやり方でも同じぐらい努力すると回答している。一方67%の受講生は「いいえ」と回答している。この割合をどう解釈するかには注意を要する。「はい」と回答した33%の受講生が総合英語で従来のやり方よりも努力をしなかったことを必ずしも意味しないからである。高いポイントを獲得している受講生で「はい」と回答した人の理由は大体共通しており、「英語が好きなのでやっている」であり、ポイントを獲得するしないは関係ない」というものであった。したがって、POINTシステムがそのような学生の学習意欲を減退させてはいないと結論付けることが出来る。また、ポイント数の低い受講生で「はい」と回答した人の理由も大体共通しており、「英語が好きではない」というものであった。このことから、そのような学生はどのようなシステムを使用しても努力することはあまり期待できないと結論付けることができるかもしれない。

Question 4b: 回答結果



これらの回答結果は POINT システムが受講しているどのような学生の動機づけも減退させていないことを示すものであった。4年間の傾向は「POINT システムでなければ努力しなかった」と回答している学生の割合が増加していることを示している。

2. 5. Question 4 b と 4 c のクロス集計

Question 4b の回答と Question 4c の回答をクロス集計することにより、総合英語のシステムが学生に英語を学習する意欲を増大させているか否かに関してより明確に示すことが出来よう。次頁に 4b と 4c のクロス集計結果を年度毎に割合で示した。

yy は 4b と 4c 共に「はい」と回答した者を示す。ここに該当する学生は英語がもともと好きであり、授業のやり方と学習意欲はあまり関係がない学生と考えられる。

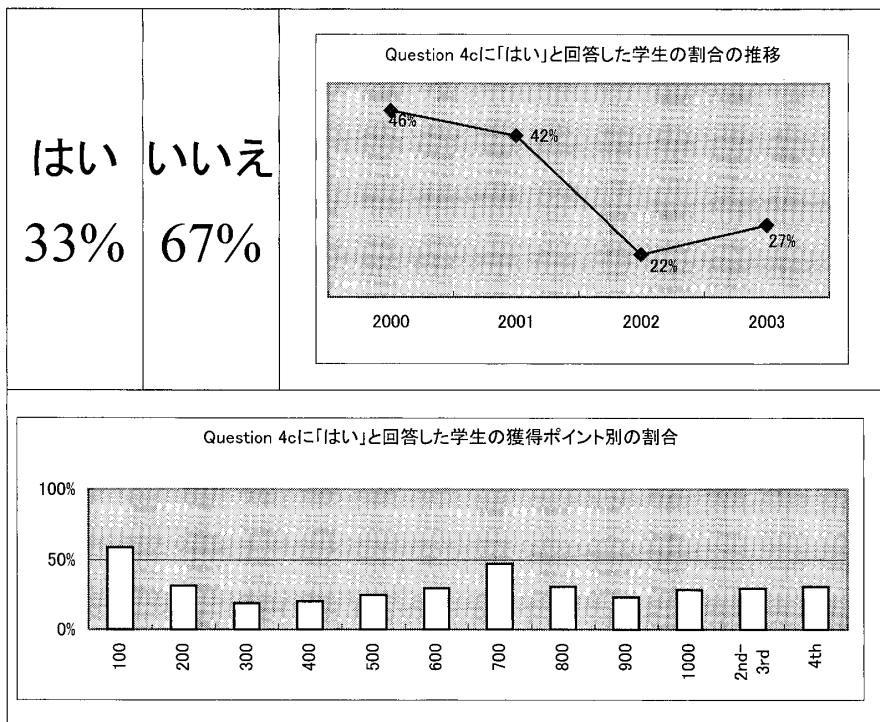
yn は 4b に「はい」、4c に「いいえ」と回答した者を示す。ここに該当する学生は総合英語のやり方によって学習意欲が増大した学生と考えられる。

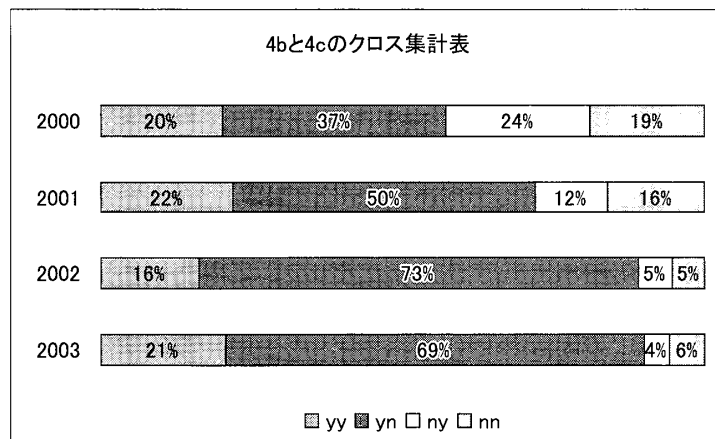
ny は 4b に「いいえ」、4c に「はい」と回答した者を示す。ここに該当する学生は総合英語のやり方によって学習意欲が減少した学生と考えられる。

nn は 4b と 4c 共に「いいえ」と回答した者を示す。ここに該当する学生はそもそも英語が嫌いであり、授業のやり方と学習意欲はあまり関係がない学生と考えられる。

yn と回答した学生は 2000 年度では 37% であったが、年度毎に増大し、2002 年度と 2003 年度の 2 年間は約 7 割程度で落ち着いている。システムを徐々に修正していった結果、高い割合の学生の学習意欲を喚起したことが見て取れる。導入年度に yn の割合が低かったのは、学生がまだ新しいシステムに慣れていなかったことや教員も授業運営上試行錯誤の段階であったため年度途中でルールが変更されたことがその原因として挙げられる。その後 yn の割合が増大した理由として、教員がシステムに慣れてきたこと、オリエンテーションのやり方を改善したこと（2001 年度）、学生のレベルに合った教材を増やしたこと（2001 年度以降）、2 コマ開

Question 4c: 回答結果





講していたものを3コマに増やしたこと(2002年度)、担当教員が変わったこと(2002年度)、取り組める分野(VocabularyとTranslation)を増やしたこと(2003年度)等が挙げられる。

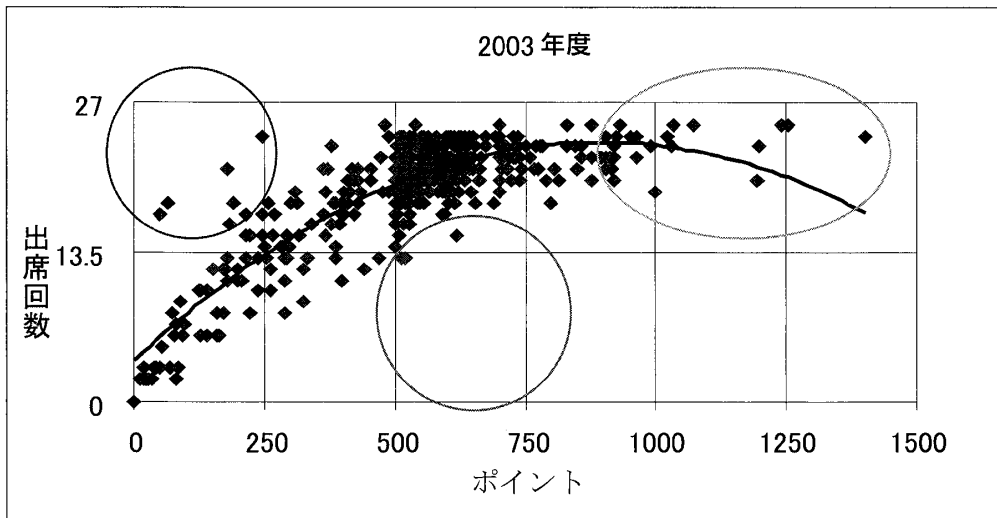
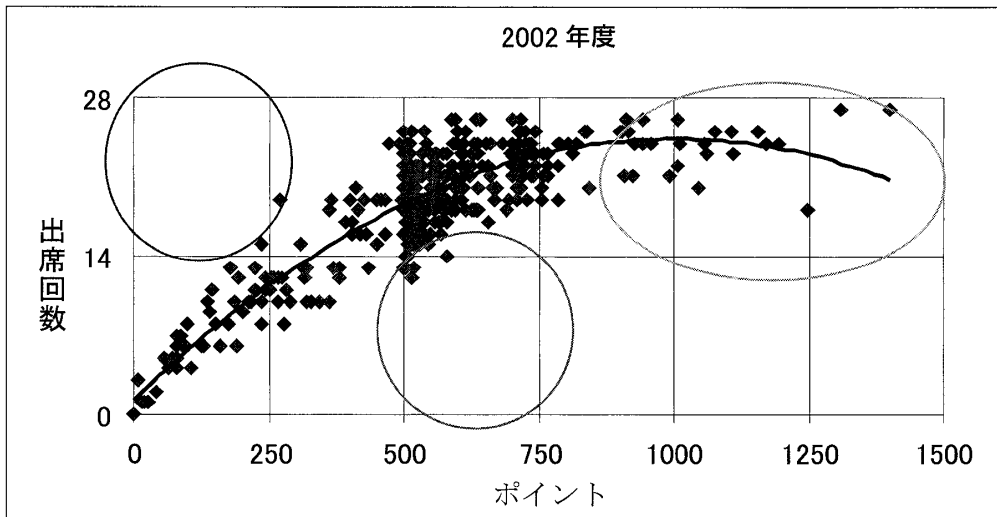
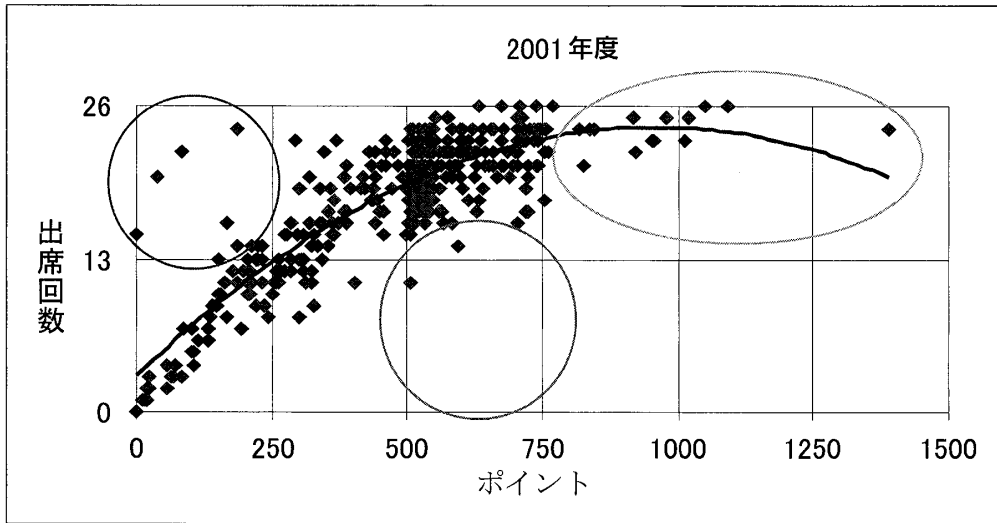
3. 出席状況と獲得ポイント

次頁に、2001年度から2003年度のグラフを示した⁽⁶⁾。それぞれのグラフで、縦軸が出席回数を示し、横軸が獲得ポイントを示している。またグラフ上の曲線は二次曲線であり、個々の点が個々の学生を示している。二次曲線から離れた位置にいる学生が教員にとって関心のある学生である。グラフの真中の円内にいる学生は総合英語の単位習得方法を簡単に見つけ出し、最低限の要求(500ポイント)を満たした後に出席しなくなった学生である。真中の円内の学生数と右上の円内の学生数を比較すると興味深い。右上の円内の学生は、もし最低限の要求(500ポイント)を満たした後に出席しなくなった場合、真中の円内にいる事になった学生である。このことは比較的早い時期に500ポイントに達した学生の大部分が引き続き授業に出席してポイントを獲得し続けることを選択したことを示している。これは意義深い事実である。なぜならこのシステムを導入する以前に教員は500ポイントを獲得した後に学生の動機づけが減退することを心配していたからで

ある。良い成績(「良」は700ポイント、「優」は900ポイント)を取る事がその学生の学習意欲を維持することに役立ったのかもしれないが、900ポイントを越えた後には、学生自身が個々の目標を設定したものと思われる。これらの事実は、総合英語のシステムが学生の動機を減退させていないという、Question 4から得られた数字を支持するものである。

前回の論文で説明したように、教員の責任は学生の学習を支援し、努力した学生が単位を修得できることを保障することにある⁽⁷⁾。もし教員がその責任を満たしているならば、グラフの左上の円内(しっかりと出席しているがポイントが取れない領域)には学生がいないはずである。左上の円内を見ると、数人の学生がこの領域にいることがわかる。これらの学生は、努力はしているがさらなる教員からの支援を必要としている学生であることを暗示させる。しかし、2001年度に4人の学生が不正行為によって0ポイントになった。このことは2001年度のグラフの左上の円内で二次曲線から最も離れている4人の学生の状況を説明してくれる。同グラフには、15回出席したが166ポイントしか獲得していない学生が一人いるが、この事は、努力をしたがさらなる教員の支援をその学生が求める必要があったことを示している。2002年度では、一人の学生が不正行為によって271ポイントを失い、0ポイントになった。その学生

出席状況と獲得ポイント



が左上の円内にいる唯一の学生である。2003年度においても同様のパターンが見られ、4人の学生が不正行為によりポイントを失っている。したがって、左上の円内にいる学生は2・3名ということになる。

4. アンケート結果と総合英語の目標

「総合英語」のシステムは仙台大学の学生たちの様々な英語に対するニーズに対応するために設定された。そのシステムの中では、学生は学習する責任を持つことが、また教員の役割は学生の学習への「推進役 (facilitator)」に変わることが望まれていた。学生は注意深く構築された総合英語の枠組みの中でどの分野のどのレベルの教材を学習するかを選択することができた。また、いつ・どれくらいの時間学習するのかについてもある程度選択することができた。学生が行なった努力は即座にポイントとして報酬が与えられた。またそれまでの学生の成果は全受講生のポイントの総計を「ランキング表」として毎週更新して示され、その週の学生の成果は「今週のランキング表」として毎週示された。

それにより個々の学生は単位修得までに自分が必要な努力や他の学生とのランク上の相対的位置を知ることが出来た⁽⁸⁾。

アンケート結果と出席状況のグラフは「総合英語」の本来の目的が達成されていることを説得的に示している。大部分の受講生は「総合英語」が適切なレベルで英語を学習する機会を与えていると回答している。また総合英語のシステムによって以前よりも学習する動機を与えられたと回答している。学生が授業中に質問する頻度が増加していることは、自分たちに学習する責任があることを、また教員の役割が「推進役 (facilitator)」であることを、学生が受け入れ、理解していることを示している。そのことはまた、受講者数が多いにもかかわらず、教員が学生の成果に関心を示し、個々の学生のレベルにあった支援を与えることを可能にしている。そして、出席状況のグラフはどのような学生が総合英語の単位を修得できないかを明確に示している。それは、学生の能力不足や教員の支援不足ではなく、授業に出席していないことが主たる原因であることを明示している。

註

- (1) 「総合英語 I」の詳細については、ジョン・ウィルトシャー、鎌田幸雄、森茂利「総合英語：理論と実践」、『仙台大学紀要』第35巻第1号(2003年10月) pp.1-14を参照。
- (2) アンケートの内容は4年間にわたりほぼ同一である。なお、2004年1月に実施したアンケート用紙を本稿の末尾に付した。
- (3) 実際のサンプル数を獲得ポイント別に次表で示した。

	0 >	100 >	200 >	300 >	400 >	500 >	600 >	700 >	800 >	900 >	1000 >	2ng/3rd	4th
2000	獲得ポイント数は不明												
2001	0	10	9	8	10	10	6	0	0	0	0	0	0
2002	0	2	3	27	23	21	8	7	5	1	2	8	2
2003	1	5	7	7	36	38	23	10	8	6	6	9	11

- (4) 以下に、4年間の集計全体で「はい」と答えた人の割合と「いいえ」と答えた人の割合を示し、その横に2000年度から2003年度までの4年間で「はい」と答えた人の割合の推移をグラフで示した。その下に、2001年度から2003年度までの3年間の集計全体で「はい」と答えた人の割合を獲得ポイント毎に示した。再履修者は2年と3年を一つのグループとし、4年を一つのグループとした。なお、Question1以外の回答結果についても同様である。
- (5) Krashen, Stephen D. and Tracy D. Terrell. *The Natural Approach*. Hertfordshire UK: Phoenix ELT

総合英語：学生アンケート結果

1995. pp 32-33 を参照。

- (6) 2000 年度の出席データは利用できなかった。
- (7) 前掲の拙論 (pp.5-6) を参照。
- (8) 詳細は前掲の拙論 (pp.5-6) を参照。

総合英語 I アンケート 2004 年 1 月

私たち担当教員は、総合英語 I をできるだけよりよいものにしたいと考えています。このアンケートはそのためのものです。ご協力よろしくおねがいします。

終わったらアンケートボックスに入れてください。

.....

男 _____ 女 _____

1年生 2年生 3年生 4年生

現在までのTOTAL POINTを記入してください

(_____ > _____)

Question 1. 目標

総合英語 I の目標は君たちに英語の練習をする機会をあたえることにあります。様々な方法で英語の勉強をする機会があったと思いますか。 はい いいえ
なぜ、他のコメント _____

Question 2. 教材のレベル

- a) あなたのレベルに合っている教材は十分ありますか。 はい いいえ
- b) チャレンジしてみたい教材は十分ありますか。 はい いいえ
- c) 教材についてのその他のコメント _____

Question 3. 先生に対する質問

- a) 先生に質問したことがありますか。 はい いいえ
- b) 誰に質問しましたか。先生の名前にまるをしてください。
森 鎌田 相田 ジョン クリス
- c) 先生についてのその他のコメント _____

Question 4. 評価のシステム

- a) この評価システム (なにかすれば POINT をもらえる) は公平ですか。
はい:なぜ? _____
いいえ:なぜ? _____
- b) この POINT による評価システムはあなたに勉強する意欲を与えましたか。
はい:なぜ? _____
いいえ:なぜ? _____
- c) この POINT による評価システムでなく従来 (高校の時) のやり方でも同じぐらい努力すると思いますか。
はい:なぜ? _____
いいえ:なぜ? _____

(平成 17 年 1 月 21 日受付, 平成 17 年 2 月 1 日受理)